
東北芸術工科大学 紀要

BULLETIN OF
TOHOKU UNIVERSITY
OF ART AND DESIGN

第33号 2026年3月

中国と日本における練り込み技法の歴史的展開について

On the Historical Development of the Nerikomi Technique in China and Japan

龍 超博 | LONG Chaobo

中国と日本における練り込み技法の歴史的展開について

On the Historical Development of the Nerikomi Technique in China and Japan

龍 超博 | LONG Chaobo

This paper surveys the historical development of the nerikomi technique in China and Japan. Based on literature and archival sources, together with identification of museum holdings, it organizes the phases of emergence, transmission, interruption, and revival. In China, the technique originated in the Tang and matured in the Song, before declining after the Yuan. In Japan, examples appear in the Momoyama period; from the Meiji era onward, studies by Suwa Sozan and, in the twentieth century, Koyama Fujio's research on the Xiuwu kilns deepened technical understanding. Since the 1950s, restoration efforts centered on Xiuwu/Dangyangyu in China have further advanced recovery of the technique. The present contribution aims to systematize the historical record; detailed aesthetic comparison and analysis of contemporary practice are deferred to future work.

Keywords:

練り込み、絞胎、修武窯、松井康成、比較研究

Nerikomi, jiaotai, Xiuwu kilns, Matsui Kosei, comparative study

(1)はじめに

本稿が扱う練り込み(練上手、絞胎)(写真1)は、陶芸における装飾技法の一つであり、色や濃淡の異なる土を練り合わせ・貼り合わせ・交互に積層して作った「文様土」を用いて成形する点に特質がある。層の重なりが作る線と面が器体上で一つの文様を構成し、同じ素材でもろくろ・たたら・加圧・手びねりといった成形法の違いによって現れる模様が大きく異なるため、単純な器形であっても多様な表現が得られる。



写真1 「夏の舞踊」龍 超博 2023(著者撮影)

練り込みの歴史的展開については、おおむね中国では唐代に成立し、宋代に精巧化・活発化したのち、元代以降に衰退したという通説が下支えする。一方、日本では桃山期に練り込み作例(志野系水指など)が現れ、のちに近代の研究・再検討(諏訪蘇山)、さらに小山富士夫による修武窯研究を通じて系譜理解が再構成されてきた。本稿はこの枠組みを前提にしつつ、中国(唐-宋-元-20世紀復

元)と日本(桃山-近代-戦後)の二重時間軸を相互参照し、成立-展開-断絶-復元という視角から時系列を整理・再構成することを目的とする。

本研究の射程は歴史叙述に限定する。すなわち、近現代作家の美学的評価や意匠比較、さらには技法の現代応用に関する詳細な論究は後続課題とし、本稿では史実の秩序化・根拠の提示・用語運用の明確化に主眼を置く。

方法論としては、第一に文献・図録・研究論文の精査を通じ、年代比定が可能な出土品・館蔵資料を優先して叙述の骨格を立てる。第二に、技法の比較(工程・材料・釉調・焼成体系)に関わる既往知見を整理し、必要に応じて現地館蔵の確認やフィールド調査、作家・技術者へのインタビューを補助線として用いる。第三に、復元史に関しては行政・研究機関・工場技術者の記録を参照し、実験・分析に関する一次記録を根拠づける。

素材面では、中国側の唐(懿徳太子墓出土「絞胎騎馬射獵俑」)および楊諫臣墓出土の小型水鉢を成立期の基礎資料として位置づけ、宋期の絞胎磁鉢(焦作市博物館)等を精巧化の指標として扱う。これらは木理紋の観察、低温釉との関係、成形と層理線の相互作用を考える上で重要である。同時に、日本側では桃山時代の「練込志野いろは字水指」を早期作例として参照し、近代の再研究(諏訪蘇山)および研究史の再定位(小山富士夫「北宋の修武窯」)を日中の史料を接合する知的転回として捉える。

さらに、20世紀後半の中国側復元(修武・当陽峪を中心とする制度的復元、標本に基づく多数の実験・分析、1982年の田修朝氏による復元成功とその報)を歴史叙述の一章として組み込み、断絶-復元のプロセスを具体的記録に基づいて描写する。

本稿の構成は次のとおりである。第2章で用語・先行研究・資料批判を整理し、第3章で中国における歴史的展開(唐-宋-元-復元)を概観、第4章で日本における歴史的展開(桃山-近代-戦後)を叙述、第5章で20世紀後半の中国側復元を詳述し、第6章で二重時間軸の小括を行う。最後に結語で今後の課題を提示する。以上の構成により、両地域の時間軸を整理し、後続の比較研究に耐える歴史的基盤を提供したい。

(2) 研究目的

本研究の目的は、中国と日本における練り込み技法の歴史的展開を、成立-展開-断絶-復元の時系列に即して再構成することにある。対象は唐代から現代に至る主要な史実・器例・研究史であり、叙述は歴史面に限定する。本章では、二地域の時間軸をどのような視角で読み直すか、また、それによって何を明らかにするかを示す。

1) 歴史叙述の再構成(中国・日本の二重時間軸)

中国側では、唐代の成立、宋代の精緻化、元以降の縮減、さらに20世紀後半に当陽峪(修武)を核として進んだ制度的復元までを、一貫した時系列として配列し直す。とくに、年代が確定し所在が明瞭な器例(例：唐の出土品、宋の絞胎器)と一次記録(調査報告・公的記録)を編年のアンカーに据え、断絶期をはさみつつも技法知の連続、非連続を読み解く。

日本側では、桃山期に現れた最初期作例、近代の再研究(研究者・作家による検討と試作)、戦後の展開(研究・制作・制度)を、中国側資料との接合という観点から通史化する。早期作例の性格や近現代の再評価は、史料上の証拠にもとづいて慎重に位置づけ、連続性の仮説と断裂の可能性を併置して検討する。

以上の二重時間軸は、同一スケールで可視化し、相互参照可能な形で提示する。これにより、個別事例の羅列に分散しがちな従来叙述を、比較可能な歴史枠組へと収斂させる。

2) 知の往還と位置づけ(連結点の明確化)

連結点の検証：日本側研究が中国側資料の解釈を更新した節目、すなわち1951年の「北宋の修武窯」(従来像の修正と時間軸の接合)を歴史上の転回点として明示し、その影響が後続の研究・制作・制度へ波及した経路を跡づける。

復元史の文脈化：1950年以降の中国における復元は、行政・研究機関・工場技術者の協働により、標本観察と試験を基盤とする制度化されたプロセスとして組み上げられた。本研究は、当陽峪(修武)での工程連鎖と、その到達点を示す1982年の復元成功、1983年の公的評価を、史料連鎖にもとづき歴史叙述の中に位置づけ直す。

それらの検討を通じて、日中の知が相互往還しながら形成してきた練り込み理解の合意点を描出する。

(3) 中国における歴史的展開 (唐-宋-元-復元への前史)

1) 唐代：成立と技法的特質

現存する確実年代の資料に基づけば、練り込み(絞胎)は唐代に成立したと位置づけられる(文献6)。代表例として、神竜二年(706)懿徳太子墓の騎馬射獵俑(写真2)(文献5)、開元二年に埋葬された楊諫臣墓出土の小型水鉢(写真3)が挙げられる。いずれも器体(もしくは像体)表面に異色層土の走行線(木理状)が連続して観察され、成形段階での引き延ばし・剪断によって文様が可視化されていることを示す。



写真2 「練り込み乗馬射獵俑」唐 中国国家博物館 所蔵



写真3 楊諫臣墓出土した練り込み水鉢 陝西歴史博物館 所蔵

この時期の作例は、多くが副葬(明器)という使用文脈に属し、表面には低温の鉛系釉(黄・褐・緑系を含む)が施された例が見られる。釉の粘性と透明度が層土文様の視認性を補助した可能性は高く、層土の配置-成形運動-低温釉という三要素が一体的に作用する技法体系が唐代段階から成立していたと考えられる(写真3,4)。

以上より、唐代の練り込みは、層土ブロックの幾何配置(貼り合わせ・積層)、②成形時の変形力(ろくろ、圧縮、切削等)による線の伸長・屈曲、③釉による視覚的統合、という工程上の結合が核であったことが確認できる。



写真4 「絞胎磁枕」唐 中国国家博物館 所蔵(著者撮影)

2) 宋代：精緻化と生産の活発化

宋代に入ると、文様は密度・間隔・方向性の点でより統御された秩序を示すようになる。器壁の曲面に沿って走行する層理線は、唐段階の自由度の高い伸長に比べ、規則的反复と局所的な微調整が共存し、全体として精緻化が進む。代表例に挙げられる絞胎磁鉢(写真5)などは、層土の帯を均質化し、成形運動の管理(ろくろの回転・圧縮方向の制御)によって線の乱れを抑制している点で示唆的である。

また、資料上は修武(当陽峪)系に位置づけられる窯業活動が目され、ここでの生産が練り込み関連技法の担い手であった可能性が高い。この期の精緻化は、後続期の縮減(元代)を見通す上でも基準点となる。



写真5 「絞胎磁鉢」宋 焦作市博物館 所蔵(著者撮影)

3) 元代以降：縮減と断絶傾向

元代に至ると、出土・館蔵資料の比較観察から、文様が小型化し、粗雑化の度合いが増す傾向が読み取れる。制作や流通を取り巻く条件(需要構造、焼成体系の変化、政体・社会制度の転換など)の複合影響により、練り込み関連の生産は次第に縮減したと考えられる。器面には、層土配

列の乱れ、帯の厚み・間隔の不均質化、釉による視覚統合の弱化といった兆候が現れ、唐-宋期に確立された秩序性からの後退が可視化される(写真6)。



写真6 「紋胎香炉」元 ミネアポリス美術館 所蔵

この縮減は地域一様ではなく、散発的な試作や模倣的作例の可能性は否定できないが、現時点で確実に連続を示す系列は限定的であり、断絶的相貌を呈する点は否めない。

4) 近現代への橋渡し：研究の活性化と復元への前史

長い停滞を経て、近現代に入ると資料調査と研究史が活性化し、練り込みに関する歴史理解が再編される。国内外の研究者による報告や再検討が積み重ねられ、修武(当陽峪)をめぐる史料の読み替えが進んだことは、のちの制度的復元(第5章で詳述)につながる知的基盤となった。ここでは詳細に立ち入らないが、20世紀後半の復元は、標本観察と実験を中心に据えた体系的な工程連鎖として整えられ、断絶していた技術の再獲得へと向かった点を指摘しておきたい。

5) 小括

以上の検討から、中国における練り込み技法は、唐での成立-宋での精緻化・活発化-元以降の縮減という前近代の推移を経て、近現代において研究の再編と制度的復元へと向かう歴史像を示す。唐段階で確立した層土-成形-低温釉の結合が、宋段階では工程制御の精緻化として展開し、元段階でいったん縮減する——この流れを把握しておくことが、第5章の復元史(工程・組織・到達点)を位置づける上での前提となる。

(4) 日本における歴史的展開 (桃山-近代-戦後)

1) 桃山期：早期作例と技術的含意

日本における練り込み(練上手)の早期作例として、しばしば「練込志野いろは水指」が取り上げられる。白素地と赤土を螺旋的に層配置して地紋を形成し、器表に鉄絵で「いろは…」の文字を施す点が特異である(写真7)。ろくろ回転と器壁曲面との相互作用により、層理線の間隔・密度が連続的に変化し、曲面上で動的な文様を生む。

もっとも、同時代に同系統の連続作例が乏しいことから、当該作品は体系的技法の確立以前に生じた試行的・個別的発現であった可能性を留保すべきである(文献9)。後世の練上手系譜において、当作は“起点参照”として回顧的に位置づけられたと理解しておきたい。



写真7 「練志野 いろは文字」水指 桃山時代



写真8 「練り上げ志野茶碗 銘 猛虎」桃山時代

2) 近代：諏訪蘇山による再研究と制作実験

初代・諏訪蘇山(1851-1922)(写真9)は、近代における練り込みの再研究と試作を牽引した。作例(《鶉斑紋香炉》など)(写真10)(文献10)と年譜を通覧すると、作家的

実験と史料参照が往還し、古来の呼称(鶉手・木理手・流墨文等)を制作可能な手続きとして再編しようとする志向が読み取れる。



写真9 初代 諏訪 蘇山(1851-1922)



写真10 「鶉斑紋香炉」初代 諏訪 蘇山

3) 1930年-1951年：小山富士夫による系譜の再定位

1930年以降、小山富士夫(1900-1975)(写真11)は在外報告(Schwalow, Karlbeck)に接し、当陽峪(修武)に関する資料と在地踏査を重ねた。1951年、『美術研究』第161号に「北宋の修武窯」(写真12)(文献2.8)を公刊し、従来「練上手=磁州窯」とされがちだった理解を修武窯(写真13)へ再定位した。論考は、低火度色釉と層土文様の結合、北宋段階の継続生産の可能性を示し、日本側の叙述を中国の時代区分(唐-宋-元)に接合する時間軸へと接ぎ直した。これにより、戦後の研究・制作・教育・制度における練上手の扱いは、窯口と時代の座標を得て再編されていく。



写真11 小山富士夫(1900-1975)



写真12 《美術研究161号 北宋の修武窯》小山 富士夫



写真13 当陽峪(修武)窯跡現状 中国 河南省(著者撮影)

4) 戦後-20世紀後半：作家の台頭と制度化

松井康成：学習の射程と選択

松井康成(1927-2003)(写真14)は、自身の学習について「中国・朝鮮・日本の陶磁を、必ずしも深くはないが一通り手を付け、そこに約十年を費やした」と述べる。その上で、練上という一分野に「止住の穴」を見いだし、生涯にわたっ

てこの領域を焼き続けたい、と進路を定めた旨を記している(文献1)。練上は中国・唐宋期に磁州窯で焼かれ始めた一分野とされ、その歴史的な位置づけを踏まえて、自らの制作をそこに結び付ける意思が表明されている(写真15)(文献4)。



写真14 松井康成(1927-2003)



写真15 練上嘯裂茜手大壺「深山紅」松井 康成

初期相：倣古の手応えと独自化への転回

松井の初期作には、磁州窯系の絞胎や黄釉作を参照・倣古した痕跡がはっきり読み取れる。たとえば壺や茶器の一组では、個性がまだ定まらない段階で、中国資料との類似や影響の受容が観察できる(写真16)。のちに、層土の帯を均質化し、ろくろ回転と圧縮方向の対応を管理し、釉の視覚的統合を活用するなど、工程の骨格を自ら作り上げ、日本側の練上としての独自の方法を確立していく(文献3)。



松井康成 初期作品 黄瀬戸壺



磁州窯 黄釉梅瓶



松井康成 初期作品 練上茶器



当陽峪窯 絞胎茶器

写真16 当陽峪窯産の陶磁器と松井康成の初期作品の対比図

伝承の制度化：1999年の研修会と課題設定

平成11年(1999年)に実施された「重要無形文化財練上 伝承者養成研修会」では、初年度の課題として「中国唐・宋(主に宋の磁州窯)における練上作品の倣古的技術」が設定された、と記録される。すなわち、日本側の練上教育は、中国資料への往還を起点に技法を学び直す枠組みを備え、それを制度的な研修として整えたことが示されている(写真17)。



写真17 《没後10年人間国宝 松井康成》茨城県立美術館出版 2013

5) 総括：日本側展開の構造

以上を総合すれば、日本側の歴史展開は、

- (1) 桃山の受容(起点参照の獲得、体系化以前の試行的発現)
- (2) 近代の再研究(作家実験-史料参照の往還)
- (3) 1930-1951年の再定位(修武窯という窯口・時代座標の確定)
- (4) 戦後-20世紀後半の拡張(制作-研究-教育-制度)

の閉環と公共化)

という四相構造として理解できる。中国側の「唐-宋の確立と精緻化、元以降の縮減、20世紀後半の制度的復元」と同一スケールで並置することで、日本側の不連続な端緒と近現代の再構のあいだに生じた歴史的合流の位相が可視化される。

(5) 20世紀後半の中国側復元

1) 学術的端緒と現地調査(1951年前後)

前近代における生産の縮減を経たのち、戦後中国では失伝技法としての練り込み(絞胎)を歴史資料に基づき再検討する機運が生じた。1951年、故宮博物院の陳万里らが当陽峪(修武)を現地調査し、遺存標本の確認と技法復元の可能性を報告したことは、以後の制度的取組に先立つ学術上の端緒として位置づけられる(写真18)(文献7)。同時期、日本側では小山富士夫の研究により修武窯の歴史的な位置づけが再整理され、日中双方の知見が当陽峪を媒介として交差した。



写真18 「修武當陽峪陶瓷」修武縣政協文史資料No.26

2) 工場設立と復元の着手(1957)

1957年、修武縣當陽峪村東に陶磁器工場が設立され、絞胎技法の計画的復元が正式に始動した。当時は参照しうる一次記録や完形資料が限られ、研究・行政・生産の三者が連携して、古片標本を起点とする実験-試作-評価の循環を組み立てた。初期段階では、標本から読み

取れる層土の帯厚・間隔・方向性を「模様規範」とし、粘土配合比と成形運動(ろくろ回転、圧縮方向)の組み合わせを反復試行する方法が採られた。地方志や工場記録によれば、1975~1978年に復元体制は本格推進期を迎え、工場内に実験チームが組織された。工程はおおむね、①標本観察(断面切断・層理線の計測)、②配合追試(層土の可塑性・収縮率・焼成収縮の調整)、③成形(ろくろ・圧縮・切削の組合せ管理)、④施釉(低温鉛系釉の粘性・透明度の調整)、⑤焼成(温度曲線の最適化)、⑥評価(器壁断面・表面模様の一貫度検証)というプロセス鎖として整えられた(写真19)。



写真19 修武縣當陽峪村東陶磁器工場昔の制作風景(著者撮影)

3) 技術者個人の到達: 田修朝の1982年成功と公的認知

1982年、当時の陶磁第四工場の工場長・技術者であった田修朝が、練り込み磁器の復元に成功し、絞胎磁盤などの作品を制作した。この成果は1982年3月10日付の新華社ニュース原稿で公表され、翌1983年6月の受賞状により制度的評価が与えられた(写真20、21)。これらは復元成功を裏づける一次的証憑であり、工程再構成が試作段階を超えて製品化に到達したことを示す。

制度的復元は、行政(文化部門・地方政府)-研究機関(博物館・大学)-工場(技術者・管理職)の三層協働により支えられた。前副工場長の袁志泉による回顧は、現場での工程再構成と組織運営の実相を補う証言として重要である。また、陳万里による1951年の現地調査は、當陽峪に関する学術的関心を惹起し、のちの制度化へ接続する長期的トリガーとして評価できる。個人の到達(田修朝)と組織

の学習(実験チーム)の相互補完が、復元の成功条件であった。

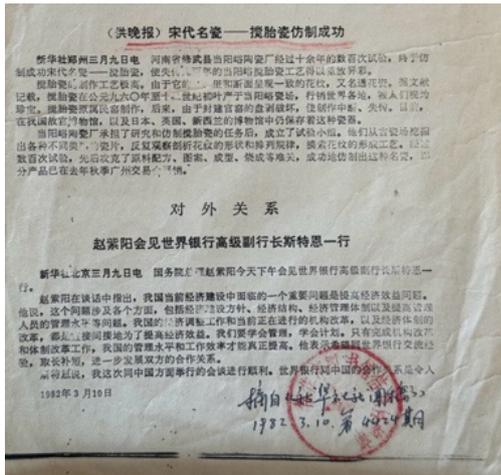


写真20 新華社新聞稿 1982年3月10日載(著者撮影)



写真21 田修朝氏が勤めた修武県陶磁工場の受賞状 1983年6月(著者撮影)

本章の叙述は、現地調査報告(1951年)、工場設立・地方志(1957年、1975-78年)、一次証憑(1982年新華社原稿・1983年受賞状)、工場関係者の回顧記録、という多元的資料連鎖に基づく。一次資料の優先という原則の下、口述資料は年月・主体・場所を特定しつつ使い、矛盾が生じる箇所は工程別・項目別に切り分けて評価した。なお、画像資料や内部文書の散逸・非公開により、用語の運用や個別工程の細部に不確実性が残る点は明記しておく。

4) 小括：断絶から再獲得へ

以上より、当陽峪(修武)を核とする制度的復元は、1951年の学術的端緒-1957年の工場設立-1975-78年の本格推進-1982年の技術的到達と1983年の公的認知という時系列の鎖として把握できる。標本観察を起点

に工程変数を制御するプロセス科学的方法が、失伝技法の可逆的復元を可能にし、その成果は製品化と制度的評価により可視化された。第6章では、以上の復元史を中国・日本の二重時間軸の上に重ね、相互参照可能な年表・写真版として総括する。

(6)全体像：二つの時間軸を同一スケールでみる

本稿で再構成した二つの時間軸は、次のように要約できる。

- 中国軸：唐の成立 宋の精緻化・活発化 元以降の縮減
20世紀後半の制度的復元(修武、当陽峪)。
- 日本軸：桃山の受容(早期作例) 近代の再研究(諏訪蘇山) 1930-1951年の再定位(小山富士夫) 戦後の拡張。

両者は同一スケールで対照したとき、成立期の非同時性(時間的ズレ)と、近現代における知的・制度的な合流が同時に見えてくる(写真22「中日練り込み史 年表対照」)。

1) 対応関係の節点

年代の異なる二つの軸を橋渡しする節点は、概ね次の五つに整理できる。

1. 成立-早期参照：唐・宋の技法形成、精緻化(中国)⇔桃山の早期作例(日本)。後者は体系化前の試行的発現であり、前者を回顧的に参照して起点に位置づけられる。
2. 再研究の始動：近代の諏訪蘇山(日本)-作家的実験と史料参照の往還-が、後続の学術化に足場を提供。
3. 系譜の再定位(1951年)：小山富士夫「北宋の修武窯」により、従来像(練上手=磁州窯)が修武窯へ再定位され、中国の編年と日本の叙述が接続。
4. 制度的復元(1957/1975-78/1982/83)：当陽峪(修武)での工場設立-実験体制の整備-技術的到達と公的認知(田修朝)が、断絶-復元の可逆性を例証。
5. 戦後の公共化：日本側の制作-研究-教育-制度の循環(例：1999年の研修会課題=中国唐宋の倣古的技術)が、知の往還と共有化を推進。



写真22 日中練り込み史 年表対照

2) 非同時性と合流：時間差の含意

日本軸の早期作例は、唐-宋の技法成熟と非同時であり、数百年の時間差を隔てて近代-戦後に学術・制度の形で合流する。ゆえに、練り込み史を一方向の移動として描くよりも、「断絶を含む多点的連結」として捉えるのが妥当である。

連続性：層土-成形-低温釉という工程結合の核が、中国側で成立精緻化し、近現代に再検証・復元されたこと。

断絶、再構：日本側では不連続な端緒（桃山）と近代の再構があり、外部資料との往還を通じて体系化が進んだこと。

以上の二相が、1951年の知的節点と当陽峪での復元節点において重なり、現在の共有地平を形成する。

3) 位置づけの確定と次章への橋渡し

以上の通観により、本稿の射程で必要な歴史的整序は達成された。すなわち、中国軸の成立-精緻化-縮減-復元、日本軸の受容-再研究-再定位-拡張、両軸を束ねる1951年、当陽峪（修武）の節点、である。結語では、この枠組みに基づき、今後の課題（器例-根拠-出典の三段式精緻化、年表の拡充、写真版出典の標準化など）を簡潔に提示する。

本稿は、中国と日本における練り込み（絞胎、練上手）の歴史的展開を、成立-展開-断絶-復元という枠組で再構成した。中国側は唐の成立、宋の精緻化、元以降の縮減を経て20世紀後半の制度的復元（修武、当陽峪）へ至る時間軸を示し、日本側は桃山の早期作例、近代の再研究（諏訪蘇山）、1930-1951の再定位（小山富士夫）、戦後の拡張（制作・研究・教育・制度）という過程をたどった。両軸は同一スケールで対照され、1951年の知的節点と当陽峪での制度的復元を中心に、断絶を介しつつも合流する歴史像が確認できた。

叙述上の基本方針は、歴史面に限定し、史実-根拠-出典を三段で提示することで、器例・研究史・制度史の関係を可視化する点にあった。本稿の成果は、①二重時間軸の整序、②連結点（1951、当陽峪復元）の位置づけ、③写真版・年表・器例記述の統一フォーマットの提示、に要約できる。

一方で、課題も残る。第一に、确实年代の器例が限られ、画像・内部資料の利用条件に左右される点。第二に、用語の非対称（絞胎、練上手、鶉手等）が文献間で揺れ、記述の一貫性を損ねやすい点。第三に、近現代の復元史について、一次記録の散逸・未公開がある点である。これらは今後の研究で補うべきである。

(7) 今後の課題

1. 器例-根拠-出典の三段式精緻化

各器例について、〈基本情報、技法注、観察所見、根拠、出典〉の最小項目を充填する。重複記事は一次資料を優先し、相互参照のリンク(写真版番号・館蔵番号)を付す。

2. 年表の拡充と同尺化

中国(唐-宋-元-復元)、日本(桃山-近代-1930s-1951-戦後)を同一時間尺で更新。1957・1975-78・1982/83・1999年等の制度イベントを層別に可視化し、往復参照できる形で付録化する。

3. 用語対応の標準化

絞胎、練上手、鶉手、木理手、流墨文等の対照表を付録に常備。本文では初出時に括注し、以降は出典の語法を尊重しつつ統一略号で運用する。

4. 資料連鎖の一次化(スキャン・アーカイブ整備)

復元史のキー資料(例:1982年ニュース原稿、1983年表彰記録)のメタデータ整備と、画像・許諾の明確化。参照URL、閲覧条件の明記により再検証可能性を高める。

5. 写真版クレジットと利用条件の整理

館蔵・撮影者・年を統一書式で管理。図注は8ptで最小限の技法注と所蔵・出典を併記し、本文からの参照を一対一対応にする。

以上の整備により、本稿で提示した歴史枠組は、今後の技法・材料・意匠の比較研究へと直接接続し得る。断絶を含む両地域の時間軸が、共有可能な参照基盤として機能することを期待したい。

後注

1. 絞胎

中国で発展した陶磁装飾技法の一つ。色の異なる陶土を組み合わせ、練り合わせることで文様を表現する。日本では「練り込み」と総称される。

2. 練上手(ねりあげ)

日本独自の発展を遂げた練り込み技法の一種。複数の色土を積層し、切断や変形によって多彩な幾何学模様を生み出す。

3. 鶉手(うずら)

中国陶磁に由来するとされる技法。胎土に黒点や褐色の斑点が散らばり、鶉(うずら)の卵殻に似た外観を示すことから名付けられた。

4. 木理手(もくめで)

木目模様のような縞を表す練り込みの様式。異なる色土を交互に積層・切削して木材の年輪や木理のような意匠を作り出す。

5. 流墨文(りゅうぼくもん)

水墨画の筆致に似た模様を示す装飾法。色土や釉薬を流し込み、自然ななじみや流動によって文様を形成する。

参考文献

1. 国内図書

- 1) 『炎芸術』阿部出版社 No.116 2013
- 2) 小山 富士夫 「北宋の修武窯」 美術研究en : The bijutsu kenkyu : the journal of art studies号 161, p. 1-19, 1951-03-30
- 3) 『松井康成練上作品集1985-1990』講談社 1990
- 4) 『没後10年人間国宝 松井康成』茨城県陶芸美術館 2013

2. 外国図書

- 5) 『中国国家博物館』文物出版社 2022-07
- 6) 楊峽、柴站柱『中国絞胎瓷』河南美術出版社,2011-10
- 7) 『修武県当阳峪陶瓷』修武文史資料第二十六輯 中国人民政治協商会議修武県委員会 学習和文史資料委員会 2010-12

3. ウェブサイト

- 8) 小山富士夫 「北宋の修武窯」東京文化財研究所公式サイト 1951 <https://tobunken.repo.nii.ac.jp/records/6977> 2025.8.21閲覧
- 9) 荒川豊蔵 「練り上げ志野茶碗 銘 猛虎」鶴田 純久の章 お話web ページ 桃山時代<https://turuta.jp/story/archives/13382> 2025.8.18閲覧
- 10) 初代諏訪蘇山「鶉斑紋香爐」古美術瀬戸 公式サイト 近代 <https://kobijutsu-seto.jp/22133/> 2025.8.16閲覧